

---

意欲的に表現し、自分の思いや考えを伝え合う児童の育成  
—国語科における表現力の向上を目指した授業づくりを通して—

白石市立越河小学校  
校長 河原 正樹

---

## 1 はじめに

本校は宮城県と福島県の県境の山間部にあり、全校児童35名の小規模校である。縦割り活動、地域素材を活用した体験活動等、小規模校の良さを生かした教育活動の充実を図っている。児童は素直で明るく、異学年児童が仲良く学校生活を送ることができ、学校を欠席する児童がとても少ない。一人一人が良さを発揮し、活躍する場面があることで、自己肯定感や自己有用感を高めることができる一方で、幼い頃から変わらない人間関係の中で育っているため、自分や他者への評価が固定化しがちで、自分に自信を持たず、自分の良さに気付くことが難しい児童も見られる。

本校を卒業すると、児童は市街地の中学校へ進学する。生徒数が本校の10倍となり、環境が大きく変わる。卒業生の中には、慣れない環境に戸惑いを感じる者も少なくない。そのため、私達には、中学校進学後に、本校卒業生が新しい環境の中でも自分の良さを発揮し、小学校では経験することのなかった多人数の生活の中で、自信を持って自分の考えを相手に伝えたり、友達の多様な考えを受け入れたりすることのできる児童を育成したいという、切なる願いがある。大きな集団の中でも、自分の思いを伝え合い、他者と協働で問題を解決することができるようになることは、本校の児童にとって必要不可欠なことであると考えられる。

## 2 主題設定の理由

### (1) 児童の実態から

児童の意識調査では、授業中自分の考えを「よく話している」「だいたい話している」と答えた児童の割合は全体の約85%と高いが、発表することに対して苦手意識を持っている児童がいることも明らかになった。友達と話し合う学習について「得意」「どちらかという」と得意」と答えた児童の割合も全体の約85%で、友達との話し合い活動に前向きな児童が多いことが分かった。令和3年5月の全国学力学習状況調査では、国語の

平均正答率は64.7ポイントで、全国平均正答率を0.7ポイント下回った。長文を読んで、要約することや必要な情報を見つけることに課題が大きいことが分かった。

### (2) これまでの研究から

令和2年度から2年間、同研究主題の基、国語科における授業改善について校内研究を進めてきた。1年次は、話すことや発表することを苦手としている児童が多い実態から、「話す・聞く」領域に重点を置き、中でも話すスキルを向上させることで、児童の表現力を養うことを目指した。国語科の「話す・聞く」単元の指導に力を入れ、全学級で研究授業を行う中で有効な手立てを見出すことができ、児童が自信を持って自分の考えを発表したり、友達の考えを聞いて良さを見付けたりする姿が見られるようになった。しかし、「話すこと」「聞くこと」について力を付けた一方で、「話し合うこと」には課題が残った。自分の考えを伝えることと相手の話を聞くことはできても、話を聞いて問い返したり、発言を受けて話をつないだりすることは難しく、主体的に対話することに課題が残った。また、標準学力調査の結果、「読む」領域の課題が大きいことも分かったため、本研究2年次は、「読む」領域の指導を通して、児童が主体的に対話をする姿を目指した授業改善を行った。1年次同様、全学級での研究授業を通して、主に文学的文章で人物の心情や場面の様子を叙述を基に読み取る力を伸ばすことができた。さらに読み取ったことを児童同士が交流する場面を設け手立てを工夫したところ、児童は進んで自分の考えを伝えることができるようになった。しかし、互いの考えに問い返したり、さまざまな考えの良さに気付いて深めていったりすることは難しく、課題が残った。

以上のことから、3年次も継続して本研究主題のもと校内研究を進めることとした。引き続き「読む」領域の指導を重点的に進めていくが、2年間の研究の成果と課題を受け、2年次で研究授業を実施していない説

明的文章の読解指導を通して、表現力の中でも互いに考えを伝え合う力を伸ばし、児童が主体的に対話をする姿を目指して手立てを探り、研究目標の達成に向けて、学校全体で協働的に研究を進めていくこととした。

### 3 研究目標

児童が意欲的に表現し、自分の思いや考えを伝え合うことができるようにするための指導の在り方を、国語科における実践を通して明らかにする。

### 4 目指す児童像

国語科の学習において、意欲的に表現し、自分の思いや考えを伝え合おうとする児童	
低学年	文章を読んで感じたことや分かったことを伝え合うことのできる児童。
中学年	文章を読んで感じたことや考えたことを伝え合い、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くことのできる児童。
高学年	文章を読んでまとめた意見や感想を伝え合い、自分の考えを広げることのできる児童。

### 5 研究の視点と手立て

児童同士が自分の考えを伝え合う対話の力を伸ばすため、研究の視点として具体的な手立てを考え、有効性を検証することとした。

**視点：友達と対話する力を身に付けさせる手立ての工夫**

以下の具体的な手立てを考えた。(⑤については、研究授業の実践を通して見出した手立てである。)

- ①自分の考えを持たせるために「書きこみブック」(本文をコピーした冊子)を活用する。
- ②互いの考えを可視化し共有できるようにする。(ICT等の活用)
- ③対話する場面(必要感のある場面設定)を計画的に想定して、授業を組み立てる。
- ④グループやペアなど、対話が生まれやすい学習形態を工夫する。
- ⑤対話する場面での教師は、児童の発言をつなぐファシリテーターとしての役割を果たすよう努め、児童が話す場面を増やす。

### 6 研究の内容と検証方法

- 研究授業の実施(全担任が実施)  
学年研究部での話し合い→事前検討会(模擬授業、

指導案検討)→研究授業→事後検討会(小グループでのワークショップ形式)

- 参考文献収集
- 先進校視察
- 児童の意識調査と分析
- 教員の意識調査と分析
- 学力テスト結果の分析
- 学習を支える日常的な指導、環境の整備
- 家庭学習の推進

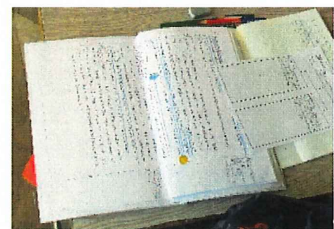
### 7 研究の実際

年間で6回の研究授業(特別支援学級における自立活動の研究授業1回を含む)を行った。事後検討会では、参観者がワークショップ形式で話し合い、成果と課題を明らかにし、課題については改善策も探った。毎回の研究授業で明らかになった成果と課題を、研究主任が校内研究通信にまとめて職員間で共有し、次の研究授業や日々の授業に生かした。また、研究授業や事前事後検討会に市指導主事を招いて助言をいただき、研究を深めることができた。

- ①自分の考えを持たせるために「書きこみブック」(本文をコピーした冊子)を活用する。

2年次の研究から文章読解の手立てとして使用してきた「書きこみブック」を、3年次でもそれぞれの学年の発達段階に応じて全学年で工夫しながら作成し、活用した。単元の学習計画表や自分で読み取りの学習を進めるための手引き(レベル表)も盛り込み、見通しを持ち主体的に取り組むことができるようにした。

4学年「くらしの中の和と洋について調べよう～『くらし



(写真1)

の中の和と洋』の授業では、事前に児童に取り組みせる内容を示し、できたらシールを貼って励ますことで、児童は意欲的に「書きこみブック」を活用し、事前学習に取り組むことができた。中には、書き込みの内容がかなり充実している児童(写真1)もいて、自分の力や興味関心に応じた個別最適な学びができていた。また、児童が意見交流する際には、それらの書き込みを基にして話をすることができ、「書きこみブック」に事前に取り組みせることで友達に話したくなる考えを持たせることができれば、それが対話



につながる事が分かった。さらに、文章としっかり向き合うことで、読解力を伸ばすことができた。

②児童の考えを可視化し共有できるようにする。(ICT等の活用)

6学年「筆者の論の進め方を確かめよう～『イースター島にはなぜ森林がないのか』」では、Google Jamboard を使用し、児童の考えの可視化を図った。Jamboard の付箋紙を使用し、児童それぞれが気付いたこ



(写真2)

とを記入し貼り付け、分類していくことで、考えが整理、集約された(写真2)。全員の考えが可視化されたことで、対話の糸口が見つかり、児童同士の主体的な対話が生まれた。

2学年「どうぶつのひみつをさぐる」では、作成した「ひみつカード」(写真3)を見せ合うことで、友達との対話生まれ考えを共有することができた。



(写真3)

考えの可視化によって対話が生まれるきっかけができて効果的であることが分かり、他学年の授業でも積極的に取り入れることになった。

③対話する場面(必要感のある場面設定)を計画的に想定して、授業を組み立てる。

単元の授業構想を練る際に、対話場面を計画的、意図的に組み入れるようにした。

5学年の「書き手の意図を考えよう～『新聞記事を読み比べよう』」では、2社の新聞記事を読み



(写真4)

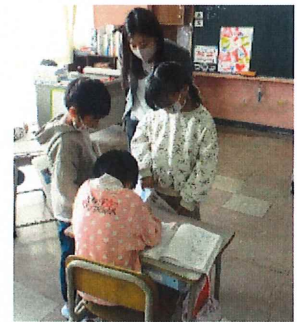
比べる学習で、児童を2グループに分けそれぞれの新聞社の記者という設定にし、自分の新聞記事で最も伝えたいこと(書き手の意図)を話し合い(写真4)、それぞれプレゼン発表するという活動を行った。対話の必要感が生まれ、児童が自分事としてとらえて、活発な話し合いができた。しかし、対話は目的ではなく、あくまで授業のねらいを達成させるための一つの手

段であることを、授業を組み立てる上で忘れてはならないということも再確認した。

④グループやペアなど、対話生まれやすい学習形態を工夫する。

前述の5学年の授業では、授業中はずっとグループの学習形態をとった。そのため、常に友達と顔を合わせることで、「友達と相談しよう」「確認しよう」「書いてみよう」という雰囲気があり、自然な対話生まれやすかった。その後、国語科だけでなく他教科の授業でもグループの学習形態を日常的に取り入れて、協働的な学びの実践を積み重ねることができた。

1学年「のりものものをしらべよう～『いろいろなふね』」では、児童3人が自然に集まって自分の書いた「のりものカード」を見せ合って考えを伝え合う中で、自然な対話生まれ、なんとか



(写真5)

自分たちで答えを見出そうとする姿が見られた(写真5)。

⑤対話する場面での教師は、児童の発言をつなぐファシリテーターとしての役割を果たすよう努め、児童が話す場面を増やす。

①の6学年「筆者の論の進め方を確かめよう～『イースター島にはなぜ森林がないのか』」では、児童同士の話し合い場面の約10分間、授業者は聞き役に徹した。話し合いを全面的に児童に任せたことで、児童主体の話し合い活動が成立した。一方で、進行役の児童に戸惑いが見られた場面もあり、教師の介入の仕方について教員が考えるきっかけとなった。

どのように児童の対話に介入するかということについては、他学年の研究授業でも毎回話題になり、私達の大きな課題となった。教師の介入が多すぎると、児童は教師に頼ってしまい、自分の考えを言えなくなり、児童の主体的な対話にならない。しかし全く介入しないと話し合いは深まらないことから、教師は児童の発言をつなぐファシリテーター役を務めるべきということが分かった。そこで有効だと気付いたのが、下記の児童同士をつなぐ言葉である。本年度の実践後の検討会で出たこれらの言葉を使い、児童同士の関わりや対話を生み出す工夫ができるようになりつつある。

### 児童同士をつなぐ言葉

- 「どう思う？」
- 「どうしてそう思った？」
- 「それってどういうこと？」
- 「〇〇さんは何て言ってた？」
- 「〇〇さんの話を聞いてどう思った？」
- 「(友達と)話したい人は話してきていいよ。」
- 「〇〇さん悩んでいるみたいだよ。」

## 8 研究の成果と今後の課題 (○: 成果, ▲: 課題)

### (1) 研究の視点に沿って

- 「書きこみブック」を活用することで、自分の考えを持つことができ、相手に自分の考えを伝える手がかりになった。
- ICTやホワイトボード、ワークシートなどを使用することで、考えが可視化され、対話のきっかけになることが分かった。
- 児童が友達と意見交換したくなる場面を設定すると、主体的で自然な対話が生まれ、活発に意見交換する姿が見られた。
- ペアで意見交換する、グループで話し合うなど、児童の実態や学習内容に応じた学習形態をとると、自然な対話が生まれやすいことが分かった。
- 教師主導の授業から脱却するために、教師は児童同士をつなぐ役割を果たすことが大切である。その際「つなぐ言葉」が有効である。
- ▲ ファシリテーターとしての教師の役割については、多くの教員が難しさを感じている。どこまでを児童に委ね、どこで介入するのか、課題である。

### (2) 学力調査より

令和3年から5年の全国学力学習状況調査の、国語の平均正答率は次の通りである。

国語	R3年	R4年	R5年
本校	60	74	73
全国	60.7	65.6	67.2
かい離	-0.7	+8.4	+5.8

- 平均正答率が全国平均を上回るようになり、国語の学力に大きな伸びが見られる。
- 「読むこと」の問題で正答率が高く、読解力の向上が見られる。
- 「思考力・判断力・表現力等」の領域でも正答

率が高く、中でも記述式の問題で成果が見られた。

- ▲ 目的に応じて、文章や資料から必要な情報を見つける問題の正答率が低く、依然として課題があることが分かった。

### (3) 児童意識調査より

児童意識調査は次のような結果であった(一部抜粋)。

	7月	2月
国語の学習が好き。どちらかという と好き。 (理由)・みんなで話し合うと面白い・話し合いが好き ・物語文が面白い・グループで活動するから	91%	78%↓
国語の勉強が分かる。どちらかとい うと分かる。 (理由)・書きこみをするから・友達と考えるから ・文章を読むことで分かるから・みんなと一緒にやるから 授業中自分の考えを話している。	88%	91%↑
	75%	75%→

- 国語の勉強が「分かる」と答えた児童の割合が高くなった。
- ▲ 国語の学習が「好き」と答えた児童は増えたが「どちらかという」と好き」と答えた児童はやや減少し、全体的な減少につながった。
- 国語が「好き」と「分かる」両方の理由に、「みんなで話し合うと面白い」「友達と考えるから」「みんなといっしょにやるから」などの、協働的な学びに対して前向きな記述が増え、児童同士の対話を意識した授業づくりの効果が表れていると考えられる。

## 9 おわりに

「先生、みんなで考えていいですか？」6年教室では、国語の授業に限らず、学校生活のさまざまな場面でこのような言葉が聞こえるようになった。一人でできないことでも、友達と一緒に解決すればできる。悩んでいる友達がいいたら、なぜ悩んでいるのかを考えて、どのように声を掛けたらいいか考える。協働の学びを通して成長が認められる6年生の姿から、「自分の思いや考えを伝え合う児童」を目指してきた本研究の成果を感じる。

今後は、教師に与えられた課題に主体的に取り組む姿をさらにステップアップさせ、児童が自ら課題を見出し、それぞれが自立した学習者になることを目指したい。新たな環境でも、主体的に自身の課題をとらえ、協働的な学びで解決していける児童を育成できるよう、本研究の成果と課題を生かし、今後も研究を進めていきたい。